



# 安積の歴史シリーズI



## 第4回 奈良・平安時代

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会  
委員



### 奈良・平安時代

奈良・平安時代は、8世紀から12世紀末までの500年間で、唐の律令に倣い大宝律令や養老律令等を制定し、天皇を中心とする中央集権的な官僚制支配を特徴とした時代である。<sup>(1)</sup>

### 陸奥国と国府

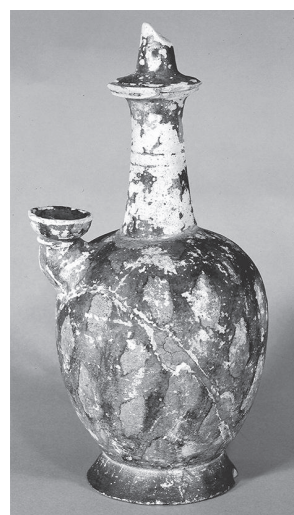
奈良・平安時代、地方の行政区画は、国・郡・里（のちに郷に改称）であった。

大化改新（645年）の後、奥州は道奥国と記され、東山道のさらに奥、さい果てという意味であった。その後、天武5年（676）頃までに陸奥国と称されるようになった。<sup>(2)</sup>

道奥国は、現在の福島県と宮城県南部を合わせた地域と推定され、その後山形県の内陸部・宮城県の中中部まで広がり、和銅5年（712）に山形県の最上郡・置賜郡を割いて出羽国を設置した。<sup>(3)</sup> 養老2年（718）には、陸奥国から石城国・石背国が独立分置した。石城国は石城・標葉・行方・宇多・亘理、および常陸国の菊多の6郡、石背国は白河・石背・会津・安積・信夫の5郡である。しかし、神亀5年（728）頃には石城国・石背国は廃止され、再び陸奥国に編入された。<sup>(4)</sup>

天平年間（729～748）に陸奥国府は、宮城県

の多賀城に移されるが、それ以前の国府の所在地については不明である。『郡山市史』は、郡山と須賀川付近をあげ、郡山に方八丁の地名があること、清水台から古瓦が出土していること、七ツ池から第1図の奈良二彩釉浄瓶が出土していること、横塚の地名が前方後円墳を連想させるなどに



第1図 奈良二彩釉浄瓶  
(郡山市小原田 円寿寺所蔵)

より、初期の国府は郡山地内にあったと推定している。<sup>(4)</sup>

### 安積郡8郷

『和妙類聚抄』によると、安積郡には、入野・佐戸・芳賀・小野・丸子・小川・葦屋・安積の8郷があったことが記載されている。<sup>(4)</sup>

その後、延喜6年（906）に入野・佐戸の2郷を割いて新たに安達郡が設置され、さらに11世紀から12世紀頃に阿武隈川の東が田村荘として分かれた。<sup>(4)</sup>

8郷の所在地について、吉田東伍の『大日本地名大辞典』によると、安積郷は日和田・富久山・富田・片平・安子島辺り、葦屋郷は郡山・小原田・大槻辺り、芳賀郷は船引・常葉・大越辺り、小川郷は田村郡守山辺りから御館・高瀬・宮城辺り、小野郷は田村町小野町付近、丸子郷は三春辺り、佐戸郷は東安達の小浜辺り、入野郷は二本松・油井・川崎辺りとしている。

『郡山市史』は、安積郷・葦屋郷・小川郷・佐戸郷・小野郷・入野郷は『大日本地名大辞典』とほぼ同じであるが、芳賀郷は安積町・三穂田付近、丸子郷は三春・旧逢隈辺りとしている。安達郷については、『大日本地名大辞典』に『和名類聚抄』が記載を漏らしたとし、岩根・玉ノ井・杉田辺りとしている。

このように、両書には若干の違いが見られるが、平安時代の安積郡の範囲は、南は現在の郡山市安積町から、北は安達郡安達町辺りまで、西は奥羽山脈の山裾から、東は田村郡小野新町辺りまでを含む広大な範囲であったが、安達郡の設置や田村庄の分郷により、西は奥羽山脈の山裾から東は阿武隈川まで、南は笹原川から北は五百川の間に縮小したのである。

### 江戸時代に古瓦・焼米が出土

江戸時代に書かれた書物に、清水台付近から古瓦や焼米が見つかったことが書かれている。

享保13年(1728)に今泉道清が著した『虎丸長者の古事』に、「虎丸・長者屋敷・上野(上台)から出た瓦が、境に山のように積み重なっている、皿沼の南畑からは焼米が出ている」とある。文政4年(1821)の今泉貞一の『貞一随筆』には、「主税持(力持)から焼米が、鐘堂の東を文化年中に井戸にするため掘ったところ夥しく瓦が出た」とある。『郡山旧事考』は「上台より廢瓦が出ること、瓦の質が多賀城のものと比較し少しもろく、中に布目瓦と称すものもあること等より、虎丸長者宅址でなく鎮守府址、焼米が出るところが税米を納める廩跡」と記載している。<sup>(4)</sup>

### 清水台遺跡の発掘調査

清水台遺跡の発掘調査は昭和39年に第1次調査が始まり、現在も調査を続けている。清水台遺跡は当初は寺院の跡と考えられ、遺跡名も清水台廢寺跡と付けられていたが、<sup>(5)</sup>現在は安積郡の郡衙跡とされ、遺跡名も清水台遺跡と改称している。

郡衙には郡庁・正倉・厨・寺院等の建物が建てられていた。郡庁は役人が詰め仕事をする所、正倉は租庸調等の税を保管する所、厨は公務で訪れた役人の食事等を賄う所、寺院は本堂やそれに関連する所である。

発掘調査によって、掘建柱建物・竪穴住居・溝・土坑等の遺構が見ついている。竪穴住居は縄文時代から続く住居であるが、掘建柱建物は高床式で、郡庁・寺院・倉庫等である。

調査によって見つかった遺物には、瓦や土師器・須恵器等がある。瓦は6世紀末期頃に朝鮮の百濟から日本に伝わり寺院等に葺かれた。

瓦には男瓦・女瓦がある。男瓦は筒瓦・丸瓦、女瓦は平瓦と呼ばれ、男瓦の列の先端(軒先)に鑑瓦を、女瓦の列の先端に宇瓦を飾った。鑑瓦は軒丸瓦、宇瓦は軒平瓦とも呼ばれている。

清水台遺跡から鑑瓦(軒丸瓦)・宇瓦(軒平瓦)・男瓦・女瓦が見ついている。鑑瓦には、第2図のように複弁連華文軒丸瓦と素弁連華文軒丸瓦等があり、宇瓦は第3図のように枝状偏行唐草文字瓦・葉状偏行唐草文字瓦等がある。

郡山市内の麓山や大槻町阿良久・原田から瓦を焼いた窯が見つかり、開成山や大槻町愛宕台・花輪から瓦が採集されている。窯は密封して焼く登窯で、地名を付して麓山瓦窯跡等と呼んでいる。



第2図 鑑瓦  
左：複弁連華文軒丸瓦 右：素弁連華文軒丸瓦  
(出典『安積野のパイオニアたち』(個人蔵))



第3図 宇瓦

左：枝状偏行唐草文字瓦 右：葉状偏行唐草文字瓦  
(出典『郡山市文化財 研究紀要』第4号)

麓山瓦窯跡は、麓山公園内の麓山神社の境内に所在している。昭和33年に調査し、窯跡が5基見つかかり、窯の中から瓦と須恵器が出土した。<sup>(5)</sup>

大槻町の原田瓦窯跡、阿良久瓦窯跡を調査した結果、原田瓦窯跡から窯跡3基と鏡瓦や平瓦が出土し、阿良久瓦窯跡から窯跡4基と鏡瓦・平瓦・丸瓦が出土した。<sup>(5)</sup> 開成山や愛宕台・花輪から鏡瓦・宇瓦・男瓦・女瓦が採集されている。

これらの瓦を詳細に調べた結果、清水台から見つかる瓦は、麓山・開成山・愛宕台・花輪・原田・阿良久等で焼かれた瓦であることがわかった。麓山の瓦は7世紀後半から8世紀初頭、開成山の瓦は麓山の瓦の少し後、愛宕台の瓦は8世紀中期から後期に焼かれた瓦、花輪や阿良久・原田の瓦は8世紀後半から9世紀の瓦で、花輪や阿良久・原田の瓦は、補修のために焼かれた瓦であることが判明した。<sup>(6)</sup>

また、土器のなかに、第4図のように墨で「厨」と書かれた土器がある。『郡山市史』には、清水台と赤木が接する辺りから出土しているとある。<sup>(7)</sup> さらに、第12次・15次・18次調査でも厨と書かれた墨書土器が見つかっている。厨に関連する建物が建っていたと見られる。



第4図 墨書土器

(出典『平成25年文化財企画展郡山の歴史を変えた遺跡』)

### 安積郡の郡司・豪族

神護景雲3年(796)3月、安積の丈部継足が阿倍安積臣の姓を賜った。継足はすでに外従7位下の地位にあったが、新たに阿倍安積臣の姓を賜ったのである。これは、中央政府が陸奥国の大造である道嶋嶋足の申請により、陸奥国の豪族

24人が一括して賜姓されたもので、継足もその1人である。中央政府の蝦夷政策に協力したことにより、郡司を公認されたのである。<sup>(8)</sup>

その2年後、宝亀3年(772)7月、丈部継守等13人が、阿倍安積臣の姓を賜った。継守は官位を有していないので、安積の有力豪族であったのであろう。同時に、継守を含め13人が姓を賜っている。安積郡には姓を賜るほどの豪族が台頭していたのである。

延暦10年(791)9月、安積郡大領外正8位上の阿倍安積臣継守が外従5位下に任じられた。継守は、宝亀3年(772)に阿倍安積臣を賜った継守であろう。宝亀3年には無位であったが、延暦10年(791)までに郡司に命じられ、外正8位上の官位を授けられていた。さらに、延暦10年には外従5位下に昇進した。異例の昇進である。軍糧を中央政府に寄進した功によるものである。

さらに、安積では、延暦16年(797)に外少初位上丸子部古佐美・大田部山前が大伴安積連の姓を、承和10年(843)11月には安積郡百姓外少位下狛造子押麻呂が陸奥安達連、貞観12年(870)12月には、矢田部今継・丈部清吉等17人が阿倍陸奥臣の姓を授かっている。狛造子押麻呂は安達郷の人であろう。<sup>(9)</sup>

このように、安積郡には新たな豪族が成長しており、蝦夷との緊張関係にかかわるなかで、有力な新興豪族が郡司に任じられ、また姓を授かる者が出現していたのである。

### 註

- (1) 平凡社『日本史大事典』
- (2) 『郡山市史』1
- (3) 註1
- (4) 註2
- (5) 『郡山市史』8
- (6) 高松俊雄「郡山市麓山瓦窯出土の瓦について」『福島考古』25号、戸田有二「古代陸奥国推定安積郡衙跡出土古瓦とその供給瓦屋」『郡山市文化財研究紀要』第4号
- (7) 註2
- (8) 角川書店 新版『古代の日本』⑨東北・北海道
- (9) 『郡山市史』1、『郡山市史』8